



# ともに生きる

2013年1月19日発行（第26号）

## 「ホームレス」札幌には84人—2012年夏の調査—

昨年8月25日（土）に、札幌市内各所で路上生活者の実数を把握する調査を実施しました。

この調査は、1999年から夏と冬の年二回実施されるもので今回で14回目になります。今回の調査は「北海道の労働と福祉を考える会」の会員及び有志を含めた26名で、AM 3:00~6:00頃にわたって行いました。調査の方法としては、2~4名一組で札幌市内各地を10コースに分けて巡回し目視によりカウントしました。

札幌駅周辺	32名（男25女3不明4）
大通公園周辺	26名（男24女2）
創成川・中島公園	8名（男7女1）
狸小路・すすきの	5名（男5）
札幌郊外（5コース）	11名（男7女2不明2）
豊平川河川敷	2名（不明2）
計	84名（男68女8不明8）

84名という数字は昨年度（夏61名、冬57名）に比べて20名以上増えています。特に札幌市中心部への集中が顕著で、郊外で確認された人数が多かった前回冬の調査と対照的です。

また男女比は男性68名、女性8名、不明8名となっており、前回冬の調査（男40女7不明10）に比べて男性が大きく増えました。あるいは女性がコンスタントに10名弱存在していることも注目したほうがいいかもしれません。

さて、いずれにせよこれはどのように考えればいいのか、今後労福会で議論しましょう！

## 「知らない」よりは「知っている」ほうが良い

### ——事務局長就任の挨拶

はじめまして。

中途半端な時期からではありますが、10月より事務局長に就任した高田晃太郎（たかだこうたろう）です。なぜ10月からなのか、そこは置いておくとして……時期も時期なので、ここではこれからの会の方針というよりも、僕の個人的な「思い」のようなものを書いてみようと思います。

労福会の何よりの魅力は、「烏合の衆」であることではないでしょうか。年齢層はバラバラ、会としてのまとまった考え（理念）はないし、会員のホームレス支援に対する考え方もてんでバラバラです。「脱路上すべき」と考える人もいれば、「路上生活を尊重しよう」と考える人もいます。傍から見れば不思議な団体と思われるのかもしれませんが、（学生主体ということもあって）流動性が激しい労福会では、ここが大きな魅力でもあるんじゃないかと思っています。

労福会は表向きには「ホームレス支援」と銘打っているものの、僕はこの「支援」という言葉にずっとくすぐったさを感じ続けてきました。そもそも「支援をする」という言葉には、上から目線の要素が含まれています。夜回りでカップ麺を渡すとき、相手から申し訳なさそうに「すみません」と言われると、大したことはしてないんだけど……と、こちらが申し訳なくなってきました。経済的にも精神的にも「自立」できていない学生がホームレス「支援」をするというのは、一体どのような意味合いを含むのでしょうか。

ホームレスの人たちと接してきた中で僕が学んだことといえば、そして、唯一自信を持って言えそうなことは、何かを発言するときには、その対象について知らないよりは知っているほうが良い、ということです。だから知りたい、分からないんだけど知りたい、そして知ろうとするんだけど分からない……。その過程の中で、時には疲

れてしまうこともあるし、投げ出したくなることもあるでしょう。こちらの何気ない一言・行動が相手を傷つけてしまうことがあるし、その逆もあります。「他者理解」って本当に難しいことだよなあ、、とひしひしと感じる今日この頃です。

けれども、相手のことを本当に知ろうと思うなら、ぐっとこらえて話を聞く、その一点に尽きるのではないのでしょうか。「その話はもう聞いた」「そんなことを今聞きたいんじゃない」というのでは、自らの思考を止めてしまうことになる。だからもうひたすら話を聞くしかない。そして、自分の感じたこと、考えたことを率直に相手にぶつけてみる。そうした一連の行為の結果、自ずから出てしまう行為というものが結果的に「支援」と呼ばれるものであるならば（その逆もあるかもしれませんが）、労福会も捨てたものではないんじゃないかと思ったりします。（けれども「実際」のところはそれがとても難しく、いつも戸惑いを抱きながら活動に参加しているというのが正直なところですよ）

さて、烏合の衆のまま10年ちょっと何とかやってきた「労福会」も今後の行方が見えなくなってきました。今年度は事務局長不在に象徴されるように事務局体制が不完全な状態でスタートしました。（会報の発行が大幅に遅れたのも、こうした事情があったからなのでした）。

人手不足は毎年深刻です。そろそろ新しい世代が出てきてくれればとは思っていますが……。



（事務局長 高田晃太郎）

# 12月8日炊き出し報告

報告：栗田 萌希

- 【日時】2012年12月8日（土）  
17時準備開始・18時炊き出し開始  
21時撤収完了
- 【会場】札幌市民ホール
- 【共催】札幌司法書士会
- 【来場者数】54名
- 【参加者】労福会 28名（うち初参加 22名）  
司法書士会 16名
- 【内容】食事提供、衣料・物資配布、散髪、  
司法書士会によるクイズ・相談会

## アイデア募集中

今回初めて炊き出し担当を任せましたが、司法書士会との共催だったこと、及び高田事務局長をはじめベテランスタッフの方々の手厚い補助があったことで、当日に至るまで僕自身はあまり貢献していなかったような気がします。

今回、最も腐心したのは、人数集めと、その後の役割分担です。

当初はぎりぎりまで人数が集まらず心配していましたが、最終的には28名（司法書士会の方々を除く）がスタッフとして参加してくれました。しかし、労福会から参加した炊き出し経験者は6名のみで、初参加者は22名に及びました。初参加者のうち18名が大学の先生経由でグループ参加した方々だったので、もし今回それがなかったら、運営上厳しい人数になっていたのではないかと思います。炊き出しの計画や買い出しの段階から、労福会のメンバー複数で取り組むなど、労福会の「メンバー同士で作ってる感」があったらいいなあと思う今日この頃です。

僕自身が初めて炊き出しに参加したとき、野宿者の方に話しかけるきっかけも見つけれず、また仕事も一体何をしたらいいかわからず、身の置き場がない時間を過ごしたという記憶から、役割分担については一番気を遣いました。初参加の人達にどう仕事を割り振れば手持無沙汰になってしまう人を作らずにいけるか、あるいはどういふきっかけを与えれば野宿者の方と交流を持ってもらえるか、といったことを考え、アイデアを練りましたが、残念ながら斬新なアイデアは思いつけませんでした。トランプを用意してスタッフと野宿者の方で遊んでもらう、なんてことも考えましたが、結局当日は話しかけるきっかけとしての簡単なアンケート用紙をスタッフに配布するだけになりました。アンケート用紙を持って積極的に話しかけていく初参加者の方もいましたが、やはり炊き出し後半には結構な人数の初参加スタッフがただ立っているだけになってしまいました。

新たな学生会員を増やすためにも、ただ食事を渡すだけではない炊き出しをやっていくためにも、せっかく来てくれた初参加者に交流のきっかけを与えられるような何かを考えだしたいと思います。皆さんも是非素敵なアイデアを下さい。



## 『路上生活者支援 13年の歩みと東日本大震災』

## 12・15 講演会の報告

報告者：楠高志

12月15日（土）の午後1時30分から4時30分まで、北海道クリスチャンセンターの大ホールを借りて、仙台夜回りグループの理事長今井誠二さんを招き、『路上生活者支援13年の歩みと東日本大震災』という題目で、講演会を開きました。

この時期に、支援者数と野宿者数が圧倒的に多い東京や大阪でなく、なぜ仙台の人をお願いしたかと言うと、やはり、東日本大震災から2年近く経過し、あの時に、仙台の野宿者（当事者）、支援者はどうしていたのだろうという素朴な疑問を感じたからでした。

講師の今井誠二さんは、仙台の尚絅学院大学の准教授が仕事上の肩書きですが、バプテスト仙台南キリスト教会の牧師さんでもあり、NPO法人仙台夜回りグループの理事長という立場でも活躍しておられます。講師の来歴紹介のあと、今井さんが持って来られた、仙台夜回りグループの動画映像を、15分の予定で見ました。ところが映写している途中で動画が凍り付いてしまい、急遽今井先生の機転を利かせたお話で、対応していただく事になってしまいました。運営側の準備不足で、講師と来場者の皆様に迷惑を掛けてしまいました。

講師のお話は、13年前の雪の降る公園で段ボール1枚をひいて寝ている野宿者の光景から始まりました。その後ワールドカップ開催の時に、野宿者の排除が始まった事、当初カトリック教会の援助で活動を続けていたが、考え方の違いから独立した会を設立したこと、一般市民から見た野宿者に対する、見知らぬ者への恐れから来る排除したいという気持ちに遭遇して、何とか理解して貰おうと尽力したことなどを聞きました。

震災時は、自分達の経験を生かして、被災者に対して1日に6千～1万食を供給したそうです。震災後、路上の人々の顔ぶれは以前と変わり、全国のいろいろな所から30～50代の方が仕事を求めて仙台に集まり、思ったほど仕事先が無くまた十分な賃金をもらえなかったりして路上に溢れ出る現象が起こっています。そのような中、決して充分とは言えない施策の行政に働きかけて、仙台福祉プラザで野宿者に対するシャワー事業を開始したり、医療券の配布、ラジオ体操の行事を始めたなど、参考になるお話もたくさんありました。

休憩を挟んで後半は、会場から講師にいろいろな意見・質問を投げかける時間をとりました。その時間の中で、私達「北海道の労働と福祉を考える会」の初代事務局長である山内先生の貴重な話も聴けました。最後にいちばん心に残ったという、今井さんが炊き出しである野宿者から聴いた言葉を記して置きます。それは「30分で消える幸せでなく一何か残ることをしてくれねえか？」



# 国際大と酪農大に行ってきました

札幌国際大学と酪農学園大学から、授業の一環として、札幌のホームレスの現状と労福会の活動について講義してほしいというお話があり、それぞれ 11 月 30 日と 12 月 5 日に高田くんと横山さんと三人で行ってきました。まず高田くんが全体の説明をして、その後で私と横山さんが初めての夜回りや生活保護の同伴などで感じたことを話す、という構成です。授業後、学生のみなさんから感想を書いてもらったので、その一部を紹介させていただきます。



地元でもこちらでもあまりホームレスを見たことがなかったので、今この裕福な日本にたくさん路上生活者がいることという現実を知ってショックでした。

ホームレス支援の活動はとても大切なものだったし、ホームレスの実態を少しでも知ることが出来てよかった。

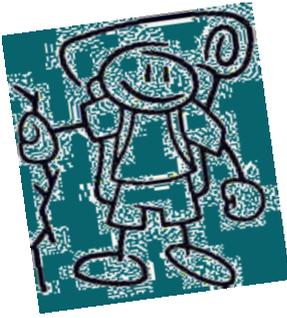
…といった感じで、路上生活者の存在すら知らなくて驚いた、知って良かったという感想がとても目につきました。そして次に多かったのは、「機会があれば活動に参加したい」という趣旨のものでしたが、残念ながらまだこちらに具体的な連絡はありません。いやいやまだその機会ではないぞ、と思っているのか、それとも外部の団体ということで気をつかって書いてくれたのか…。しかしそんななか、「参加したくない」とはっきり書いている人もいました。

ボランティア（労福会の活動）に参加したいかと言われれば、参加はしたくない。自分のことですら手いっぱいであり、友人のグチなどを聞きアドバイスもできないので、今の自分では役に立たないと思う。それともう一つは他人にあまり興味が無い。自分と知人が幸せならば、それ以上は何も望まない。



うーむ。他にも、「私には誠実さが無いからこういう活動には不向きだ」とか「労福会の活動は誰にでもできることじゃない」といった内容の感想もいくつかありました。だけど本当にそうなのかなあ。私だって友人にろくなアドバイスできないんだけど…。

あーもっと話したいよ！やっぱりいろんな考えの人に労福会に来てほしい！どうすればその「機会」になれるのー！…と、非常に歯がゆい二日間でした。（下郷沙季）



# タカダコウタロウの 「もうどっか行くしかない！」

日雇い労働者の街・釜ヶ崎。そこは日本最大、そして日本唯一のスラム街といわれる。僕たちは年末年始、釜ヶ崎の越冬闘争に参加した。(高田晃太郎)

## 第四回「釜ヶ崎を歩く」

釜ヶ崎に来て間もなく、一人ぶらぶら歩いていると、露店を出しているおじさんがいる。

ラジコン、CD、ゲームソフト、シップ…どこから仕入れたのか分からないがとにかくラインナップが面白いので写真を撮ってもいいかと訊ねてみると、ムッと嫌そうな顔をして、「500円！」と法外な値段を請求された。広島太郎(第三回「広島を歩く」)の時と同じだ、でもあの時は500円だったなと思いながらも、「200円！」

「いや、300円だ」

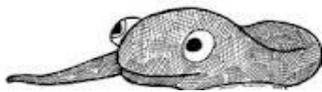
結局、250円で妥協して写真を撮らせてもらったのだが、おじさんは本当にお金が支払われると思っていなかったのか、お金を受け取ると態度が一変して柔らかくなった。

「兄ちゃん、どこから来たん」

「北海道です」

「そうか…俺はな、静岡出身だ。気づいたら刑務所に25年も入った。……以上だ！」

そうっておじさんは握手を求めてきて、僕の手の甲にキスをした。しかも唾液たっぷりのやつを、だ。そのようにして、僕の釜ヶ崎体験は始まった。この街は絶対に面白い、そう予感させる出来事だった。



釜ヶ崎は大阪・西成区にある日本最大の日雇労働者の街だ。日雇いで稼いだ賃金で食事をし「ドヤ」と呼ばれる日払いの簡易宿泊所に泊まる、というのが一般的な釜ヶ崎の労働者の日常である。

野宿をしている人も多い。公園はどこも不法占拠(スクウォット)されてテント村が形成されている

し、裏通りに行くとなんか段ボールハウスがずらりと並び、そのまま路地でぶっ倒れて寝ている人もいる。

50円の自動販売機、1泊500円のホテル、鞆丸をぶら下げてその辺をうろつく野犬…。みんなところ構わず立ちションベンをするものだから、街全体をアンモニア臭がおおう。僕が最初思ったのは、この街は水たまりがやけに多いということだったが、実はそれはみんなションベンの水たまりだったのだ。

とにかく見聞きするもの全てが新鮮で、どの体験も興味深いものだったが、特に興味深かったのはとある公園に住むおじさんの話。

その公園の一画にはテント村が形成されていて、おじさんもその村に住む住民の一人だった。家の中を見てみたい、僕たちのそうした要望におじさんは「ここはオープンだから」と快く応えてくれた。

中はちょっと狭いだけでふつうのアパートの部屋と変わらない感じだ。畳まで敷いてある。生活に必要な日用品は全て拾ったものや譲ってもらったもの。僕たちはコーヒーをごちそうになり、色々話を聞かせてもらった。次の一言が印象的だ。

「こういう生活は楽しいけれど、好きでやっているわけじゃない」

けれども今の生活を続けているのは、福祉を頼ることへの躊躇いがあるようだった。ホームレス生活の多様性、豊かさを謳いたい反面、色んな事情が絡んでいるがゆえの脱路上の困難性、ホームレス生活の厳しさにも思いを馳せずにはいられなかった。

それでも釜ヶ崎は魅力的な街だ、と今は思う。そこには生のエネルギーが充満している。もっと色々な人の話が聞きたい、そう思わずにはいられない刺激に満ちた5日間だった。

## 新しい会員を紹介します！



11月から会員となった高橋といいます。今は社会人ですが、学生のころからホームレスの方の支援に関心があり、いつか何らかの活動に参加してみたいと思っていました。インターネットで労福会の存在を知り、まずは夜回りに参加させていただきました。今まではメディアを通してでしか知ることがなかったのですが、活動を通して実際にホームレスの方と話をさせてもらい、私が知らなかったホームレスの方の生活や考えが少しずつ見えてきたと感じています。また、一方では声をかけても会話を拒否される方もいて、ホームレスの方との関わりの難しさも感じています。入会したばかりでまだまだわからないこともありますが、これからも労福会の活動に参加させていただきながら、ホームレスの方の支援についていろいろと考えていけたらと思っています。ご迷惑をかけることもあるかもしれませんが、みなさんよろしくお願いします。(高橋真弓)

**今年度は他に、相原正義、井上敬一、大橋多朗、栗田萌希、下郷沙季、田口桃江、東美乃里、堀翔太郎、諸岡大地、山口大輔、山崎雄大、渡部友子(敬称略)が新しく会員に加わりました。**



昨年10月頃から活動にちよくちよく参加するようになったのですが、気づけば会員になっていて、おやおやと思ったら事務局員になっていて、そうこうしているうちに会報を作っていました。それだけ人手が足りていないということであ

り、同時に一人一人の負担が増えているということで…そして負担が大きいと気軽に会員になってくれる人も現れないというわけで…ううっ、悪循環だ。2ページで高田くんが「労福会の何よりの魅力は、『烏合の衆』であること」と書いていますが、人が少なすぎるのと、余裕がなさすぎるのとで、烏合の衆である良さというのは現段階ではあまり出しきれてないようにも思えてしまいます。うーん…うーん…(下郷沙季)





毎月第一、第二、第三土曜日は  
夜回りがあります

1/26(土) 17~19時

### 講演会「女性と貧困-路上の視点から」

(場所は北海道大学の文系棟 W309、立命館大学丸山里美准教授をお招きします)

2/16(土) 18~20時

炊き出し (場所は中央区民センター、札幌司法書士会との共催です)

3月には**総会**を予定しています!

## ご寄付をいただきました

北一条教会、木下武徳、工藤浩美、児玉俊仁、小林幸一、塩崎満子、中島圭子、廣瀬知弘、細谷洋子

(敬称略、2012年4月~2013年1月19日現在)

## ありがとうございました!

### 労福会って?

北大の教養科目「一般教育演習」で野宿者調査を行なったのをきっかけに、教育学部の教官や学生が中心となって1999年に発足した任意のホームレス支援団体です。現在は学生に加えて社会人も多く参加し、主な活動として夜回り、炊き出し、生活保護申請の同伴、人数調査、学習会などがあります。

一緒に活動していただける  
会員を募集しています。  
お問い合わせは下記の連  
絡先へ。メール・お電話、  
どちらでもかまいません。

### 「ともに生きる」26号 —2012年1月19日発行

北海道の労働と福祉を考える会

発行責任者 嶋田佳広

編集担当 内山明 高田晃太郎 下郷沙季

住所 〒001-0008

北海道札幌市北区北8条西3丁目28番エルプラザ2階市民活動サポートセンターブース No.11

連絡先 (電話) 090-7515-8393 (E-mail) info@roufuku.org (HP) http://roufuku.org